

## ヤスクニ・レポ 203

### 改めて〈7・26のポツダム宣言〉を学ぶ

—広島・長崎の惨禍はなぜなのか  
代表 西川重則

#### 1

改めて最初に、敗戦後間もない1947年5月3日、日本国憲法が施行された日の主要な新聞の社説のポイントを報告したい。戦後日本の在り方を見事に反映している内容であることを確認するためである。

「日本国民は国際平和を深く深く希求する。…前途にどんな困難が横たわろうとも、日本人の勤勉と公正・信義に対する信頼とが、われわれを導くであろう」(朝日新聞)

「一切の武力行使は、たとえそれが自衛のためであつてもこれを行わぬことを世界に誓つた。…それは決して単なる“敗戦の結果”ではなく、積極的な世界政治理想への先駆なのである。」(読売新聞)

「戦争を放棄し、武に関する一切の規定を拒斥したのは国民自身の意思である。……憲法をわれわれ自身のものとし実践することが、日本を真に生かし世界に信頼を得るゆえんに外ならない。(四国新聞＝高松市)

なお産業経済新聞(現・産経新聞)は一面トップに「新憲法と世論の育成」と題する論文を掲げた。

「悪夢から醒めたわれらが、世界人類の原理とするものを己が原理とし、目的とするものを己が目的とし、手をつないで光明に<sup>むか</sup>向つて進む」

「われらが世界文化の発展に本質的な何かの寄与をなすことができれば無腰(＝非武装)になつても新日本の存在は、世界万民の共感と尊敬に

<sup>あた</sup>い 備するものとなるだろう」

以上は、「朝日新聞」、2015年5月7日、木曜日の夕刊の「新聞と9条23 軍備なき国23」からの要旨である。その最後に、「敗戦から1年8カ月

余、9条を掲げる新生日本が産声を上げた。(上丸洋一)と記し、締め括っている。

日本国憲法の施行を当時の日本人がいかに喜びの思いで感動し、その思いを披瀝していたかを、「朝日新聞」の記事の真中に写真で表わしている。そして次のように説明している。「新憲法施行を祝って朝日新聞東京本社のバルコニー(左上)で開かれた演奏会＝1947年5月3日、東京・有楽町」と。

もちろん「新憲法」の施行を喜んだのはマスコミだけではありません。最も重要な教育の世界で、たとえば全国の中学一年生の教科書として、当時の文部省によって、『あたらしい憲法のはなし』が発行され、新憲法の施行に対してどんなに喜び、中学生にもその喜びを教科書の使用によって表明していたかは解説の必要もない状況だった。

#### 2

それなら、どうして戦後71年の今日、まるで同じ国でないほど日本国憲法が軽視され、改正(改悪)運動が盛んなのか。否、率直に言って、そのような現状に気づかないままに、種々多様な出来事が起こされ、今日に至っているのではないか。私にはそう思えてなりません。事例を挙げれば切りがありません。

たとえば最近の事例では、広島・長崎の原爆投下の要因についてであるが、私が憂えている戦争の惨禍の背景について率直に言ってその要因、根本的な責任問題であるが、国ないし当事者が触れないのは一体なぜなのか、有識者を含めて、根本問題に触れないまま戦後71年を経過したこと、そして更に今後の責任課題にも深くかかわることに一切触れないのは、私にとっては最も不思議なこと、否知っていても触れないのか、いずれにしても私は以下の事例を通して今後の根本問題、責任問題に触れておきたいと思っている。

「1945年8月6日午前8時15分。澄みきった青空を切り裂き、かつて人類が経験したことのない『絶対悪』が広島に放たれ、一瞬のうちに街を焼き尽くしました。朝鮮半島や、中国、東南アジアの人々、米軍の捕虜などを含め、子どもからお年寄りまで罪のない人々を殺りくし、その年の暮までに14万もの尊い命を奪いました」

(広島平和宣言、2016年8月6日、広島市長松井一実)。

「平和記念式典」の安倍首相あいさつも同様の発言内容であり、私が願っている要因については触れていません。

なぜ広島・長崎原爆投下なのか。国家権力者の誰ひとり今日まで、私の疑問に触れ、答えてくれないのは一体なぜなのか。以下述べて見たい。

敗戦必至の1945年2月14日に、「昭和天皇」は近衛文麿の質問「国体護持のために和平交渉」を勧められた時、「もう一度戦果を挙げてからでない」と中々話は難しいと思う(原文は片仮名)と答えている(木戸幸一関係文書、参照)。

その後、7月26日に「ポツダム宣言」が発表されたが、鈴木貫太郎首相は、「ポツダム宣言」を黙殺し、「戦争邁進の談話」を発表した。その結果、

広島・長崎に原爆投下(8・6、8・9)、8月8日にはソ連が対日に参戦という悲劇が起り、多くの人々が命を奪われている。

そうした敗戦直前に、戦争の惨過がくり返され、8月10日午前2時30分に御前会議を開き、国体護持を条件に「ポツダム宣言」の受諾を決定し、政府は中立国を通じて連合国へ申し入れている。そして8月14日に、御前会議を再開し、「ポツダム宣言」の受諾を最終決定している。そして、8月14日

「昭和天皇」が「終戦の詔書」を録音し、8月15日にいわゆる「玉音放送」によって第二次世界大戦終結という歴史の事実を確認している。すべては、無責任な天皇制護持中心の発想であり、最も重要な「ポツダム宣言」の受諾を遅らせ、広島・長崎の戦争の惨過をも無視し、国体護持を中心に「ポツダム宣言」の受諾を重大視せず、その結果、日本人および在日の外国人の生命をも無視して、「玉音放送」(8・15)を行っている。「昭和天皇」の戦争責任を今もなお軽視し、「ポツダム宣言」を直ちに受諾すべきだった意味を無視したまま今日に至っていることを重大視したいこと述べて終りたい(2016・8・16)。

## 2016年7月15日例会奨励 第一ヨハネの手紙1章5～10節「神との交わり」 山川 暁伝道師 (単立鶴川キリスト教会)

聖書記者ヨハネはイエスが語った神についてのことをこう記しています。「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない」、と。イエスが生きた1世紀にあって、ユダヤ人が抱いていた神についてのイメージは、エルサレムの神殿を媒介にして描いたものであったと思われます。従って、イエスが語った「神は光なり」ということばは、ユダヤ人の耳には新鮮に響いたと同時に、リアリティを与えられたと思います。

聖書記者ヨハネは言います。「神と交わりがあると言っているながら、やみの中を歩んでいるなら、それは偽りを言っていることである」と。ユダヤ人にとって、神との交わり生きることは最も大切なことでした。神との交わりとは、神殿に上って、いけにえを捧げることでありました。しかし、神殿から離れた日常の生活はどうであったのか。それを問われたのです。光である神に背を向けて、やみの中を歩んでいるなら、それは偽りを言っていることになると指摘されたのです。それは神を偽り者とすることになるのです。

神との交わりに生きることは21世紀に生きるキリスト者にとっても大切なことです。神との交わりとは何でしょうか。ことばを変えれば、神との「密接な結合状態」と言えます。神と結合されていることは、神のことば、教えに生きることです。パウロはこう述べています。「もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。」(ローマ14:8)。主イエス・キリストと密接に結合して生きている事実を「私たちは主のもの」と証することが求められているのです。

参議員選挙の結果、アベ政権はその本質をより露にしつつあります。特に沖縄においては露骨な権力の「獣化」現象が見られます。キリスト者がそうした現実を手をこまねいているとすれば、主なる神には喜ばれません。主なる神とより密接な結合の中に歩むことで、「獣化」する権力に抵抗することが求められていると思います。